

佐賀地域アート小史 2001-2015 年

花 田 伸 一

A Brief History of Art in Saga area between 2001-2015

HANADA Shin-ichi

要 旨

日本においては主に 1990 年代後半から地方創生や観光促進等の文脈とも深く関わりつつ、他国とは異なる独特な形での「地域アート」（ある地域名を冠した美術のイベント）が展開されており、佐賀県内においても同様の動きが複数見られる。本稿ではこれまでまとまった形での記録がほぼ残されていない佐賀県内における地域アートについて、特に 2000 年以降の事例に関する情報をできる限り整理した上で概観を試みる。

具体的には、佐賀市内の事例として、美術グループ「VAROC」（2004-12 年）の活動、佐賀大学生が商店街と共同で取り組んだ『アートコンプレックス』（2008）および『呉福万博』（2009-12 年）、『コミニカ展』（2011、12 年）について、有田町内の事例として、『庭園陶彫展 CERAMIC SCULPTURE IN GARDEN』（2005 年）、『有田現代アートガーデンプレイス』（2006-13 年）、『Media Butterfly in Arita』（2014、15 年）について、それぞれ入手した資料をもとに情報を整理し、概観する。

■はじめに

本稿は 2000 年代以降の佐賀県内にて取り組まれた、いわゆる「地域アート」と名指しうる表現活動のいくつかの事例について概観を試みるものである。

本稿でいう「地域アート」の語義は、藤田直哉編著『地域アート 美学／制度／日本』において提示されたとく簡単な定義、すなわち「ある地域名を冠した美術のイベント」¹との定義で示された範疇に従っている。日本においては主に 1990 年代後半から地方創生や観光促進等の文脈とも深く関わりつつ、他国とは異なる独特な形で「ある地域名を冠した美術のイベント」が展開されてきた経緯があり、特によく知られた例として『大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ』(2000 年～)、『瀬戸内国際芸術祭』(2010 年～) 等が挙げられる。現代アートを通じて地域活性化や観光促進を導いた成功例として特に上記 2 例を中心に雑誌やテレビ等のマスメディアで大々的に取りあげられたこともあり、以降、大小さまざまな「地域アート」と名指される取り組みが国内各地に起こり、佐賀県内においても同様の動きが複数見られることとなった。

しかしながら表現活動によくありがちな現象、つまり、主催者がイベントの準備と実施に奔走するあまり、その記録や関連資料の収集・整理・保存にまでなかなか意識が及ばないという現象は佐賀においても特に変わらず、たかだか 10～20 年前のことながら手に入る資料もまばらである。したがって今回その全体像を網羅的に捉えきれたとは

言い難く、未だ調査途上ということで、本稿は現時点で収集しえた資料をもとに綴る「小史」としておく。

なお、筆者は 2016 年に佐賀大学に開設された芸術地域デザイン学部の教員として赴任したことを機に、県外(福岡県北九州市)から佐賀市へ移住してきたが、本稿で取りあげる事例については、ごく一部を除き、ほとんど実見しておらず、このたびの概観は関係者への聞き取りおよび彼らから提供された資料(当時のチラシ類および会場写真)を情報源としている。

■VAROC (2004-12 年)

VAROC は 2004 年に佐賀大学文化教育学部美術・工芸課程の学生を中心に活動をはじめた有志グループの名で、当初グループ名はついておらず、2009 年に開催した企画展の名がその後グループ名として事後的に定着したもの。確認できる限り、2012 年まで VAROC 名義での活動が見られる。彼らの活動は特に地域名を冠しているわけではないため、単純に「地域アート」の議論の範疇には収まらないかもしれないが、彼らが美術館やギャラリーなど美術作品の展示に特化された場以外の場所にも活動の場を広げていた点、および、学部内で先輩から後輩へと継承される過程で後につづく佐賀の「地域アート」を導いた点において、その端緒と見て差し支えないだろう。

WEB 上の『福岡・九州関係アーティストプロフィール』掲載の「VAROC」ページ²には、

¹ 藤田直哉編著『地域アート 美学／制度／日本』、堀之内出版、2016 年、7 頁。同書は「地域アート」の語を用い、そのように名指しうる諸活動についての問題点を提起し、関係者間の議論の端緒となった。

² <https://faprofile.exblog.jp/14303227/> (2021 年 11 月 26 日閲覧)

《VAROC》井上泰宏／駒井翔平／佐藤／塩月悠／渋谷修平／杉尾浩貴／高津眞／田嶋克匡／田嶋紘太／浜崎／山下耕平／山本翔／UG
 《PROFILE》佐賀・福岡・熊本・愛知・東京にて活動。ユニットとしてだけでなく個々の作品発表も行っており、絵画・映像・彫刻・インスタレーション・音楽をはじめ、電気工事から塗装、ライブパフォーマンスまで様々な表現を展開する。

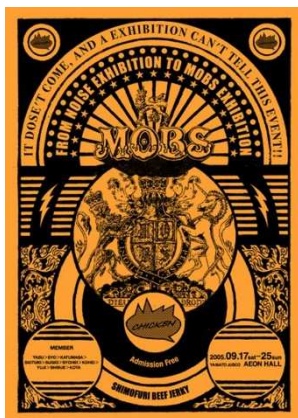
(2011年8月現在)

とある。ほか確認できた限りのVAROC関連の情報をまとめると下記の通り。

○2004年『NOISE』

会場：ジャスコ佐賀大和店（現.イオンモール佐賀大和）内イオンホール（佐賀市大和町）

○2005年『MOBS』



会期：2005年9月17日（土）～25日（土）

会場：ジャスコ佐賀大和店（現.イオンモール佐賀大和）内イオンホール（佐賀市大和町）

参加作家：井上泰宏、山本翔、田嶋克匡、塩月悠、杉尾浩貴、駒井翔平、山下耕平、UG、渋谷修平、田嶋紘太

『MOBS』の広報物は特に統一されたものではなく参加作家がそれぞれ個別にデザインした複数の広報物が制作されたという。

○2006年『警鐘夜』

会場：IAF SHOP*（福岡市）

○2008年『呉楽横丁』



会期：[A面] 2008年1月12-14日・18-20日・25-27日、[B面] 2008年2月1-3・8・9日

会場：松屋商店（文房具店）2階（佐賀市呉服元町7-4）

参加作家：塩月悠、佐藤、井上泰宏、山下耕平、田嶋カツマサ、田嶋コータ、高津眞、渋谷修平、杉尾浩貴、POR、UG、

スタッフ：[代表] 山本翔

初めての呉服元町での活動。これが後の『アートコンプレックス』（2008年）、『呉福万博』（2009-12年）へと繋がっていく。

○2008年『カマドウマ』

会場：能古島JA倉庫（福岡市）

○2009年『VAROC』

会期：2009年3月28日（土）～4月11日（土）
会場：呉服元町アーケード内（佐賀市呉服元町）
参加作家：炎月、佐藤、山本翔、井上泰宏、山下耕平、田嶋カツマサ、田嶋コータ、高津眞、渋江修平、渋江祐介、杉尾浩貴、直木、駒井翔平、UG
内容：絵・ムービー・フィギュア・コミック・インクジェット・インスタレーション等

○2009年『VAROC2』（『呉福万博』参加）

会期：2009年9月5日（土）～9月22日（土）
会場：佐賀市呉服元町アーケード内
参加作家：炎月、佐藤、山本翔、井上泰宏、山下耕平、田嶋カツマサ、田嶋コータ、高津眞、渋江修平、渋江祐介、杉尾浩貴、直木、駒井翔平、UG、浜崎
内容：内容：絵・ムービー・フィギュア・コミック・インクジェット・インスタレーション等

○2010年『39.5℃』（『呉福万博2010』参加）

会期：2010年11月13日（土）～12月5日（日）
会場：Gallery NEST（佐賀市松原3-2-14）
参加作家：塩月悠、山本翔、井上泰宏、田嶋カツマサ、田嶋コータ、渋江修平、駒井翔平、UG、浜崎

○2011年『TOXIN』（『呉福万博2011 ART DISCOVERY』参加）

会期：2011年9月4日（日）～9月24日（土）
会場：佐賀市中心商店街中央マーケット内
参加作家：塩月悠、山本翔、井上泰宏、田嶋カツマサ、田嶋コータ、渋江修平、駒井翔平、UG、高津眞、山下耕平

○2011年『解毒』（『九州アートゲート九州沖縄アジアアート観光ウィーク』展示部門参加）

会期：2011年9月9日（金）～19日（月）
会場：JR博多シティ（福岡市）
参加作家：塩月悠、山本翔、井上泰宏、田嶋カツマ

サ、田嶋コータ、佐藤、渋江修平、駒井翔平、杉尾浩貴、UG、高津眞、山下耕平

○2012年『黄色い絵 Black - and - white of Yellow Monkeys』（『呉福万博2012 出会い』参加）

会期：2012年8月26日（日）～9月9日（日）
会場：まつや商店（佐賀市中心商店街中央マーケット内）2F
参加作家：井上泰宏、駒井翔平、佐藤、塩月悠、渋江修平、田嶋克匡、田嶋紘太、山下耕平、山本翔、UG

○2012年『祝 CAMK10周年！九州アート全員集合展』



会場：熊本市現代美術館

会期：2012年9月22日（土）～11月18日（日）

会場：熊本市現代美術館

参加作家：田中千智（福岡）、VAROC（佐賀）、永山真策（長崎）、しまうちみか（熊本）、国本泰英（大分）、宮城壮一郎（宮崎）、宮内裕賀（鹿児島）、儀間朝龍（沖縄）

主催：熊本市、熊本市文化振興財団

VAROC 名義での活動として確認できる最後のものは熊本市現代美術館の企画によるグループ展『祝 CAMK10周年！九州ア

ート全員集合展』である。九州沖縄各県から40歳以下のアーティストが1名ずつ招聘されたもので、佐賀のみユニット参加。残念ながら同展の記録冊子等は作られていない。同展チラシ裏面に掲載のVAROCプロフィールは下記の通り。

2002年、佐賀大学文化教育学部美術・工芸課程に在学中のメンバーを中心に活動をスタートさせる。一過性、イベント性、エンターテイメント性、ライブ感、空気感といった「音楽」が持つ特徴のようなものを重視し、平面や映像などを含むインスタレーションとして発表する。また2009年からは佐賀中心市街地で行われるアートプロジェクト「呉福万博」の中心グループとして活動。

活動開始2002年とあるがおそらく2004年の誤りかと思われる。ここで「音楽」への意識が強調されている通り、2021年11月現在、WEB上で確認できるVAROC関連の若干の画像や動画を見るとミュージックビデオを強く意識していたであろうことが伺える³。おそらく彼らが参照した音楽活動のアンダーグラウンド感を意識してのことだろう、彼らは光の当たる場所を避けていた、つまり世間から注目されたりチャホヤされたりするのを避けていた節があり、当時の新聞記事に一通り目を通して彼らの

活動はほとんど登場しない。ちなみにVAROCの初期の発表場所であるジャスコ佐賀大和店（現・イオンモール佐賀大和）内イオンホールはCDショップ「タワーレコード佐賀店」の隣であることを付記しておく。

■アートコンプレックス（2008年）、呉福万博（2009-12年）

「アートコンプレックス」および「呉福万博」は前項のVAROCメンバーの後輩たち（佐賀大学文化教育学部美術・工芸課程の学生）が中心となって2008年から12年にかけて主に佐賀市呉服元町の商店街を中心に市内各地で展示やパフォーマンス等に取り組んだもの。

当時、アサヒビール芸術文化財団がメセナ活動として全国の地域アート団体の活動とそのネットワーキングを支援していた「アサヒ・アート・フェスティバル」（2002-16年）（AAF）に「呉福万博」も2011年に参加しており、筆者はAAFの集まりで同活動のことを知り、メンバーとの知己を得た⁴。AAF2011パンフレットの掲載文によれば、佐賀中心市街地でアートプロジェクトを行い、各会場での展覧会や音楽祭、ワークショップ等を通じて、街、アート、学生、作家が結束していくことで、地域とアートの新しい

³ 画像は flickr 上に約 120 点 (<https://www.flickr.com/photos/varoc> 2021年11月26日閲覧)、動画は YouTube 上に「VAROC」アカウントによる動画 10 点がある

(<https://www.youtube.com/channel/UCDFHWCBcOIGHFR2586kr-yw> 2021年11月26日閲覧)。なお2019年3月の調査時にはVAROCによる公式サイトが2件(<http://varoc.zcrm.com/> および <http://varoc.web.fc2.com/>) 閲覧できたが2021年11月現在すでに閉じられている。

⁴ 筆者は当時「槻田小学校おやじの会・八万湯プロジェクト」名義による「大人の図工時間 the land school 2010-2015」という活動で2010～13年のアサヒ・アート・フェスティバルに参加していた。

関係性を探り、芸術文化を育む「場所」を創出していきます。

団体プロフィール:地域での芸術活動を通しての文化振興、学生の社会進出による青少年育成、人的ネットワーク形成、継続的な活動による表現可能な場所・環境づくりなどを目的にアートイベントの企画・運営、ワークショップなどの芸術文化振興事業を行っています。

とある⁵。まさに地域アートの定型文といった趣である。

○2008年『呉服町アートプロジェクト アートコンプレックス』



会期：2008年12月1日(月)～21日(日)
会場：呉服町商店街(佐賀市呉服元町)
主催：アートコンプレックス実行委員会、松屋商店
呉服町商店街の複数の空き店舗にてそれぞれ開かれた個展の集合体としての「複合型個展」(アートコンプレックス)。広報物もそれぞれ個別に制作された。VAROCは2008年1～2月の『呉楽横丁』から呉服元

町での展示を手がけているが、同年末に開催された本展は、VAROCメンバー以外の学生も加わり、それ以前のVAROC主体のグループ展から後の後輩たち主体の『呉福万博』への橋渡しとなった企画。

○2009年『呉福万博』



会期：2009年9月5日(土)～22日(火祝)

会場：呉服町商店街(佐賀市呉服元町)

参加作家：VAROC、KANNOW、砂糖彩、浦田琴恵、仁戸田典子、白石恵里、城野敬志、古賀崇洋、江口+品川+川原、川崎陽介、藤瀬大喜、宇宙プロジェクト、有田工業高校、松尾忠次、ほか

関連イベント：

9/5(土) 11:00- 仮装行列 於.656広場

9/11(金) 11:00-18:00、12(土) 10:00-17:00 ベンチャーサミット 2009 SAGA 於.窓乃梅(閉店したスーパー「窓乃梅」で「佐賀県ベンチャー交流ネットワーク」による商品展示販売)

9/11(金) 19:30- 野外映画上映 於.656広場

9/12(土) 20:00- ドラびでお LIVE 於.656広場

9/12(土) 13:00-、13(日) 14:00- 映画上映 於.佐賀市歴史民俗館

⁵ アサヒ・アート・フェスティバル実行委員会事務局編『ASAHI ART FESTIVAL 2011 アートツーリズムでいこう アサヒ・アート・フェスティバル 2011 公式ガイドブック』アサヒ・アート・フェスティバル実行委員会、2011年、28頁。

スタッフ：[代表] 森恭平

主催：呉福万博実行委員会（佐賀県ベンチャー交流ネットワーク、佐賀芸術物語、ばるん）

共催：CIEMA、呉服町商店街、鍋島ルネッサンス

協賛：白美堂、城野仏壇店、永浜眼科

後援：佐賀商工会議所（TMO 佐賀）

協力：アリオカスポーツ、NC さがモデル、エスブラッツ、オリックス不動産、ガーデン重永、ぎょうざ屋、古賀さん、佐賀座、中村隆敏研究室、ひぜんえびす屋、福島さん、文化サロン「ハコ」、松や、歴史民俗博物館、ユニキッズ



前年までは佐賀大学生が会場を借りながらグループ展を開いていたところに、この回から運営に呉服町商店街および外部アーティスト（城野敬志）が加わることで企画のボリュームが一気に膨らんだ。チラシの表裏での主催・共催・後援名の揺れ（上記の情報はチラシ裏面に従った）や、記載情報（作家名、ユニット名、会場、素材・技法など）のランダムさなど、チラシからも現場の異様な熱気と混乱ぶりが伺える。以降、「呉福万博」のタイトルのもと継続され、2012年まで計4回開催された。運営の中心となる学生メンバーが毎年入れ替わるため、ノウ

ハウの継承が難しかったようだ。

○『呉福万博 2010』⁶



会期：2010年11月13日（土）～12月5日（日）

会場：呉服町商店街（佐賀市呉服元町）

参加作家（学年のみの記載は佐賀大学生）：空展メンバー（1年）、矢ヶ部成子（3年）、浦郷慧人（3年）、野間千恵（3年）、馬場結布美（3年）、鬼塚美津子（3年）、宇宙プロジェクト、松尾勇貴（3年）、青子、エノキユータ（有田工業高校3年）、藤瀬大樹、小池大介（3年）、VAROC、宮崎千絵、宮崎千尋、大峯香織、トミナガマイ、吉田美香、陽月瞳、山中都、石橋英樹、渡辺真理子、白木恵美子、牛丸和人、甲斐藍子、西山正晃、瀬戸口優子、八頭司昂（2年）、荒木恵理（2年）、meg、塩戸悠、大串亮平、ほか

関連イベント：

11/13（土）9:00-11:00 仮装パレード 於.佐賀駅～呉服町商店街

11/17（水）11:00- ギャラリートーク 於.呉服町商店街

11/17（水）18:30-21:30 交流会 於.656広場

11/19（金）18:00-24:00 ライブペインティング 於.重永ビル

⁶ 公式サイト <http://gofukubanpaku.web.fc2.com/2010/>（2021年11月23日閲覧）

スタッフブログ <https://gohuku.exblog.jp/>（2021年11月23日閲覧）

ツイッター <https://twitter.com/gofuku2010>（2021年11月23日閲覧）

坂本顕子（熊本市現代美術館学芸員）によるレビュー

https://artscape.jp/report/curator/1227207_1634.html（2021年11月23日閲覧）

11/20(土) 18:00-24:00 音楽イベント 於.重永ビル
11/27(土) 12:30-17:30 大運動会 於.656 広場
12/4(土) 19:00-4:00 音楽イベント 於.RAG-G
12/5(日) 18:30- クロージングパーティ 於.656 広場
スタッフ:[代表]浦郷慧人、[副代表]馬場結布美、
[広報]矢ヶ部成子、[会計]野間千恵、[記録]小池大介

主催：呉福万博 2010 実行委員会

協力：呉服町商店街、SENYA ICHIBA カフェ本庄
2 号店、逢宇楽、Hamburger Cafe & Bar Hack Berry、
FINDER、ファクトリーエデン、トネリコ・カフェ、
Gallery NEST、PANGEA、The 3rd Place、CIEMA



呉服町商店街のほか市内のギャラリーや
オルタナティブ・スペースでのサテライト
展示も加わり範囲がより広がった。関連イ

ベントが美術のみならず音楽や飲食も交え
つつ多岐に渡るのも前回同様。

○『呉福万博 2011 ART DISCOVERY』⁷



会期：2011年9月3日(土)～24日(土)

会場：佐賀市中心市街地(エスプラッツ、かのこ、
佐賀県味噌醤油醸造協同組合、佐星醤油、佐賀市歴史民俗館、シエマ、トネリコ・カフェ、ハックベリー、FINDER、まつや、まちなか、楽庵、ルームカフェ、わいわい!!コンテナ、ほか)

参加作家：碓玄蔵写真部、宇宙プロジェクト、浦郷慧人、
ウラベメグミ、エスクリップ、乙女展、KANNOW、か
しこ、キノタクラフト、桑畑泰三、クレマ、小池大介、古賀
崇洋、佐土嶋洋佳、武富洸斗、探検屋、童話展、佐賀大学
附属小学校、先村健、杉本真輝、SMArt、村中亜紀奈、Neart、
ハナウタ研究所、はる、VAROC、飛空、藤瀬大喜、ま
しまりょうこ、meme Lingerie、木工工芸研究室、森恭平、
矢ヶ部成子、八頭司昂、吉田美香、吉永ジェンダー

⁷ 公式サイト <http://gofukubanpaku.web.fc2.com/2011/> (2021年11月23日閲覧)

スタッフブログ <http://gofukubanpaku.blog88.fc2.com/> (2021年11月23日閲覧)

フェイスブック

<https://www.facebook.com/%E5%91%89%E7%A6%8F%E4%B8%87%E5%8D%9A2011-168380156570346/> (2021年11月23日閲覧)

ツイッター <https://twitter.com/gofuku2011> (2021年11月23日閲覧)

佐賀現代アート掲示板～企画開発室～(スタッフ・出品作家の城野敬志によるブログ)

<https://sageijyutu.hatenadiary.org/> (2021年11月23日閲覧)

関連イベント：

9/3 (土) 11:00- 開会式・LOVE CRU (福岡教育大学生2名)による書道パフォーマンス、19:00-JOUパフォーマンスとクロッキーワークショップ 於.656 広場

9/4 (日) 19:00- JOU パフォーマンス 於.CIEMA

9/11 (日) 13:00- きりこワークショップ 於.ゆつつら〜と館

9/17 (土) 18:30-20:30 フォーラム 於.CIEMA

9/19 (月祝) 13:00- 街歩きツアー 於.656 広場〜会場全域

9/24 (土) 16:00- 音楽祭・クロージングパーティ 於.656 広場

スタッフ：[代表] 八頭司昂

主催：呉福万博2011 実行委員会、佐賀芸術物語

特別協賛：アサヒビール株式会社

助成：財団法人アサヒビール芸術文化財団

協賛：The 3rd Place、旬の蔵パセリ、赤ちゃん、Arrows、印路語、ギャラリーシルクロ、ぎょうぎ屋、城島質店、鶴乃堂、トネリコ・カフェ、永浜眼科、肥前通仙亭、武蔵美術材料/美術画廊、ラヂオカフェえびす



この回の会場数が最も多く、規模も最大。前述の「アサヒ・アート・フェスティバル」に参加していた繋がりから、JOU(コンテンポラリーダンサー)によるパフォーマンス、「きりこ」(東日本大震災の被災地である宮城県南三陸町に伝わる切り紙細工による神棚飾り)ワークショップが行われたほか、これまで通りの街歩きや音楽祭など幅広く行っている。

○『呉福万博2012 出会い』⁸



会期：2012年8月25日(土)～9月9日(日)
会場：佐賀市呉服元町・柳町(ピピン横、旧ナイチチ、重永ビル、旧ブルーメグミ、まつや、まちのまとなり、美穂野、いまむら、吉村呉服店、旧佐賀銀行、わいわい!!コンテナ、シエマ、旧古賀銀行、旧

⁸ 公式サイト <http://gofukubanpaku.web.fc2.com/2012/> (2021年11月23日閲覧)

スタッフブログ <http://gofukubanpaku2012.blog.fc2.com/> (2021年11月23日閲覧)

フェイスブック <https://www.facebook.com/gfk2012> (2021年11月23日閲覧)

古賀家、旧牛島家、旧三省銀行)

参加作家：OGA、shadowbox しゃらら、宮原萌／福田真子、riri、Witchcraft、原口貴之／浦野志郎、重岡美有、米村太一、北島由紀、326、金保洋、DEVE я A、VAROC、小柳友菜、ヒロノブ、市下純子、胡桃、長原大智、宇宙プロジェクト、kinotacraft、新本聡、野崎由惟、ハナウタ研究所、山、空閑由美子、江口千尋、榊原真奈美、久原瑛理、大久保朱瞳、森永樹仁、長沼杏奈、Concha branca、八坂圭、加藤里沙、藤崎千尋、ミジンコ、前原慎介、西村幸一郎、辻拓真、森山寛二郎、永留歩美、下津優太、友野恵美子、倉原誠二、白垣善晴、米谷奈保子、平木法子、ちえちひろ

ショップ参加作家：なごみのき、OZOZ、ruruka、9-me、藤瀬大喜、山(やま)、工房貴楽、Aya、金保洋、riri、pecotie、ハナウタ研究所、Happy Dot、326、田でん、池田晴美、工房どんぐり

関連イベント：

8/25 (土) 10:30- オープニングイベント 於.656 広場

8/25 (土) 11:30- 会場オープン+アートウォーク 於.656 広場

8/25 (土) 13:00- ワークショップ 於.656 広場/わいわい!!コンテナ

9/1 (土) 10:30- 茶会 於.旧古賀家

9/1 (土) 13:30- ジャズ/ダンスイベント 於.656 広場

9/2 (日) 13:00- アートウォーク 於.656 広場

9/8 (土) 13:00- ワークショップ 於.656 広場

9/9 (金) 13:30- 音楽祭 於.656 広場

スタッフ：[代表] 米谷典子

主催：佐賀芸術物語、呉福万博 2012 実行委員会

協賛：武藤美術材料、ぎやらりいふじ山、靴のカメヤ、ぎょうぎ屋、旬の蔵パセリ



「呉福万博」最後の回。スタッフブログや Facebook ページを見る限り、前回までの混沌と目眩に満ちた状況に比べ、やや落ち着いているように見受けられる。

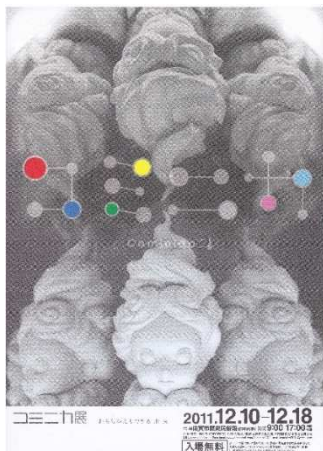
「呉福万博」では運営チームの学生が毎年先輩から後輩に入れ替わることで毎回初めての運営に右往左往したり、商店街や先輩からの期待がときにプレッシャーとなつてのしかかったりするなど、学生たちの負担が過度に大きくなりがちなることもあり、「呉福万博」はこの回をもって幕を閉じることとなった。

■ コミニカ展 (2011、12)⁹

2010 年 12 月、VAROC の塩月悠らを中心に「チームコミニカ」が結成され、原崇紀(佐賀広告センター)によるプロデュースのもと『コミニカ展』が 2 回、佐賀市内で行われた。コミニカとは古民家とコミュニケーションに由来する造語。

⁹ フェイスブック <https://www.facebook.com/cominica2011/> (2021 年 11 月 23 日閲覧)

○2011年『コミニカ展』



会期：2011年12月10日（土）～18日（日）

会場：旧牛島家（佐賀市柳町4-9）

テーマ：おもちゃでできる未来

参加作家：森山寛二郎、西山正晃、白石恵里、高松正慎・松永加奈子、田嶋紘太、南里康太、古賀崇洋、桑畑泰三、益森祐二、渋谷修平、山下耕平、原英輔（NGP）・原崇紀・酒見椅子店、平川渚、矢ヶ部成子

関連イベント：

12/10（土）10:00-17:00 ライブ…吉田主税

12/18（日）15:00-17:00 ライブ…吉田主税・マクナマン 於.干潟よか公園

スタッフ：[総合プロデュース] 原崇紀（株式会社佐賀広告センター）、[キュレーション] 塩月悠、[空間プロデュース] 犬塚博紀（ユニティデザイン）、[コンセプトワーク・コピーライト] 田口陽子（佐賀大学）

企画・運営：Team cominica

共催：佐賀県

協賛：佐賀市文化会館

特別協賛：杉本酒造合資会社



古民家を舞台として主に佐賀大学関係の若手作家たちが空間との調和を意識しつつ作品展示を行った。

○2012年『第2回 コミニカ展』



会期：2012年11月23日（金祝）～12月2日（日）

会場：佐賀城本丸歴史館

テーマ：SUPER RELAX

参加作家・作品：チームラボ《百年海図巻アニメーションのジオラマ》、GOTO AKI×高橋英明《water silence》、高橋英明×穴井佑樹×Uwe Haas《on the ground》、白石恵里×渋谷修平×石川泰昭、西山正晃、森山寛二郎、山下耕平×草月流、高松正慎

関連イベント：

11/23（金祝）19:00-24:00 ライブ…出演：white white sisters、mjuc×nrb、URAGO KEITO×KOGA SAYUMI 於.Swamp beat

11/23（金祝）～25（日）・12/1（土）・2（日）11:00-、14:00- ギャラリートーク

12/2（日）11:00- 吉田主税の音のワークショップ

12/2（日）15:30-16:30 セッショントーク¹⁰…出演：高橋英明、GOTO AKI、穴井佑樹、塩月悠、原崇紀

¹⁰ 「2012 1202 第2回コミニカ展 セッショントーク」 <https://youtu.be/qJr1UZ7hzak> (2021年11月23日閲覧)

スタッフ：[総合プロデュース] 原崇紀、[キュレーション] 塩月悠、[空間プロデュース] 宇宙プロジェクト、[コンセプトワーク・コピーライト] 田口陽子・犬塚博紀、[キャラクターデザイン] 西久保美幸、[フライヤーデザイン] 鷹巣翼、[WEBデザイン] 野中健也

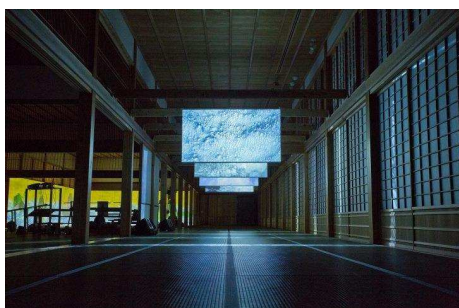
企画・運営・主催：Team COMINICA

共催：佐賀県

特別協賛：gage 高山質店

協力：竹下製菓

後援：佐賀城本丸歴史館



歴史的建造物内での大規模なインスタレーションのため、建造物に決してダメージを及ぼさぬよう設営時には細心の注意を払っての作業だったという。チームラボがまだそれほど知られていない時期にいち早く招聘している。

■庭園陶彫展 CERAMIC SCULPTURE IN GARDEN (2005)、有田現代アートガーデンプレイス (2006-13)¹¹、Media Butterfly in Arita (2014、15)

佐賀県有田町出身の美術家、原榮三郎 (1935-2004) の生家を一般公開している「原榮三郎美術館」の庭での野外展から始まり、回を重ねるごとに参加人数・規模が増していった。企画運営の中心は中村隆敏 (元有田工業高校教員、2008年より佐賀大学教員)。

原榮三郎は1935年有田町生。1953年に有田工業高校図案科卒業し、1955年に上京。美術界、写真界、芸能界、様々な分野で活躍。1999年頃より東京と有田を往復しながら現代アートを用いた街づくりに奔走。2000年に原榮三郎美術館を開館。2004年没。宇宙をテーマとした作品を多く制作している。

○『庭園陶彫展 CERAMIC SCULPTURE IN GARDEN 2005』¹²

会場：原榮三郎美術館 (有田町中の原 1-1-10)

参加作家：原榮三郎、中村隆敏、田中右紀、速見豪、三浦洋輔

¹¹ 下記サイトに部分的なアーカイブがある。

フェイスブック「Arita Media Project」ページ <https://www.facebook.com/AritaMediaProject/> (2021年11月23日閲覧)。

ブログ「有田現代アートガーデンプレイス」 <http://hara-b.cocolog-nifty.com> (2021年11月23日閲覧)

¹² フェイスブック「Arita Media Project」内画像アルバム

https://www.facebook.com/pg/AritaMediaProject/photos/?tab=album&album_id=508670122560723 (2021年11月23日閲覧)



前年の原榮三郎の逝去を受け、地元の陶芸家らが有田陶器市の時期に合わせ原の生家の庭で野外展示を行ったもの。

○『有田現代アートガーデンプレイス 2006』¹³

会場：原榮三郎美術館（有田町中の原 1-1-10）

参加作家：原榮三郎、原慶子、田中右紀、速見豪、三浦洋輔、興梠宜伸、坂井理華、川口稔光、徳永陽祐、徳永隆、浦郷正一郎、やまぐちふみとも、鷹巣翔



前年に続き、原榮三郎美術館の庭にて野外展示を実施。やきものだけでなく絵画・彫刻など他分野の作品も加わった。なお資料は未確認ながら 2006 年頃、原榮三郎の追悼のために、宇宙をテーマに音楽ライブ（出演：avandard[塩月悠+田嶋克匡+田嶋紘太]）やプロジェクションマッピングを行い、賑やかに「宇宙葬」をしたらしい。

○『有田現代アートガーデンプレイス 2007』¹⁴



会期：2007 年 4 月 29 日（日）～5 月 6 日（日）

会場：[メイン会場] 原榮三郎美術館庭園・書院ギャラリー、[サブ会場] 有田町東庁舎広場、[サテライト] TOJIN 茶屋（佐賀市唐人町）

参加作家：原榮三郎、生田謙一郎、井口環誠、浦郷正一郎、浦地里奈、川口稔光、興梠宜伸、草場勇次、坂井理華、白垣慶子、戸田真悟、中村隆敏、速見豪、原慶子、原浩高、宮部真知子、三浦洋輔、森永昌樹、やまぐちふみとも、吉田恵一、吉永登

主催：原榮三郎美術館、Ariko Media Project、チームU
共催：有田商工会議所、佐賀県高度情報化推進協議会、特定非営利活動法人佐賀県 CSO 推進機構、NPO 法人有田町どっとこむ

後援：佐賀県、佐賀県教育委員会、有田町、有田町教育委員会、佐賀県立有田工業高等学校、佐賀新聞社、U18IPv6 ユビキタス社会創造推進協議会、アジアのハリウッド構想推進会議

この回では会場の庭園を「宇宙」基地と見

¹³ フェイスブック「Arita Media Project」内画像アルバム

https://www.facebook.com/pg/AritaMediaProject/photos/?tab=album&album_id=699040093523724

（2021 年 11 月 23 日閲覧）

ブログ「有田現代アートガーデンプレイス」内画像アルバム <http://hara-b.cocolog-nifty.com/photos/2006/>（2021 年 11 月 23 日閲覧）

¹⁴ ブログ「有田現代アートガーデンプレイス」内画像アルバム <http://hara-b.cocolog-nifty.com/photos/2007/>（2021 年 11 月 23 日閲覧）

立て、陶器市の動画配信を試みている。

○『有田現代アートガーデンプレイス 2008』¹⁵



会期：2008年4月29日（火）～5月6日（火）
会場：[メイン会場] 原榮三郎美術館庭園・書院ギャラリー、[サブ会場] 有田町東庁舎広場
参加作家：原榮三郎、荒木慶子、生田謙一郎、井口環誠、甲斐景子、カイトチ友広、浦地里奈、川口稔光、川口久敏、興梠宜伸、坂井理華、佐々木杏莉紗、佐々木美栄、富永将暉、濱崎節生、中村隆敏、速見豪、原慶子、原浩高、福田雅夫、宮部真知子、三浦洋輔、吉田恵一、森永昌樹、吉永登
主催：原榮三郎美術館、Ariko Media Project
後援：佐賀県、佐賀県教育委員会、有田町、有田町教育委員会、有田商工会議所、NPO 法人有田町どっとこむ、佐賀県立有田工業高等学校、佐賀大学地域貢献推進室、佐賀新聞社、アジアのハリウッド構想推進会議

この回でも前回同様、陶器市の動画配信が行われた。2008年より代表者の中村隆敏

が有田工業高校から佐賀大学へ転職。赴任直後のイベントながら早速、後援に佐賀大学地域貢献推進室が入っている。

○『有田現代アートガーデンプレイス 2009』¹⁶



会期：2009年4月29日（水）～5月5日（火）
会場：原榮三郎美術館
参加作家：原榮三郎、小野國光、川口稔光、川口久敏、興梠宜伸、古賀崇洋、坂井理華、佐々木杏莉紗、佐々木美栄、白石恵里、鈴木ジュンコ、中村隆敏、原浩高、原慶子、速見豪、三浦洋輔、宮崎千尋、宮部真知子、森恭平、森永昌樹、山口吟子、吉永登
ワークショップ企画：佐賀芸術物語（森恭平、桑畑泰三、諏訪この実、古賀崇洋、浦郷慧人）
主催：原榮三郎美術館、Arita Media Project
共催：佐賀芸術物語
後援：佐賀県、佐賀県教育委員会、有田町、有田町教育委員会、STS サガテレビ、佐賀大学文化教育学部、佐賀県立有田工業高等学校、佐賀新聞社、有田商工会議所

¹⁵ ブログ「有田現代アートガーデンプレイス」内
ブログ <http://hara-b.cocolog-nifty.com/blog/2008/>（2021年11月23日閲覧）
画像アルバム <http://hara-b.cocolog-nifty.com/photos/2008/>（2021年11月23日閲覧）
¹⁶ ブログ「有田現代アートガーデンプレイス」内
ブログ <http://hara-b.cocolog-nifty.com/blog/2009/>（2021年11月23日閲覧）
画像アルバム <http://hara-b.cocolog-nifty.com/photos/2009/>（2021年11月23日閲覧）

この回より佐賀大学生が本格的に参加し、ワークショップ「宇宙への使者、こいのぼり～Koiのぼりに想いを描こう～」を企画実施したほか、高校生が陶器市会場からのワンセグ配信に取り組むなど、高大生の活動が注目される。主催者の一つ「Ariko Media Project」がこの回から「Arita Media Project」に変わったのは代表者の中村隆敏が2008年に有田工業高校（Ariko）から佐賀大学へ転職したことによるもの。

○『有田現代アートガーデンプレイス2010・原榮三郎回顧展』



会期：2010年2月19日（金）～3月20日（土）
 会場：焯の博記念堂文化ホール・ホワイエ（2/23・28）、有田町内サテライト会場（2/19-3/20）、有田町内、富右エ門窯ほか、ARITA-mobile (<http://d.hatena.ne.jp/arita-mobile>)

参加作家：[メイン会場]（焯の博記念堂）八谷和彦、小島淳二、真島理一郎、文化庁メディア芸術祭巡回作品、甲斐景子、川口稔光、興相宜伸、古賀義孝、白石恵里、スズキジュンコ、速見豪、古田伸彦、heirakuG、松尾浩一、的場寛、三浦洋輔、宮部真知子、森永昌樹、吉田恵一

[サテライト会場]「ARITA-mobile～場所を紐解く方法論として～」(有田町内各所) アートホーリーメン、荒瀬哲也、AMP、宇宙プロジェクト、浦郷慧人、浦田琴恵、大木千波、大串良平、奥中章人、おぼけ少年の集い、佐土嶋洋佳、鈴木淳、城野敬志、はる、宮崎千尋、高増ようこ、めもりのない定規、森貴也、寺江圭一朗、加藤笑

平、三輪恭子、冨永剛、川崎陽介、吉永ジェンダー

[賛助出品] 山本圭吾、関口照生、井口環誠、Arita Media Project

関連イベント：

2/27（土）14:00-15:30 シンポジウム「現代アートの伝統、世紀を跨ぐコンテンポラリー 原榮三郎が夢見た宇宙」（パネラー：針生一郎、山本圭吾、関口照生、いわお俊志、司会：中村隆敏）於. 焯の博記念堂文化ホール

2/28（日）14:00-15:30 シンポジウム「映像表現とメディアアート、先駆者が語る表現の今」（パネラー：八谷和彦、小島淳二、真島理一郎、司会：中谷日出）於. 焯の博記念堂文化ホール

企画：Arita Media Project、原榮三郎美術館

主催：文化庁、佐賀県地域文化芸術振興プラン実行委員会、原榮三郎回顧展、有田現代アートガーデンプレイス2010 実行委員会

共催：有田町教育委員会

後援：佐賀県、佐賀県教育委員会、有田町、佐賀県立有田工業高等学校、佐賀大学文化教育学部、有田商工会議所、NPO 法人有田町どっとこむ、佐賀新聞社、西日本新聞社、朝日新聞社、読売新聞社、NHK 佐賀放送局、STS サガテレビ、有田ケーブルネットワーク、FM 佐賀、NBC 佐賀放送局

原榮三郎の本格的な回顧展を行うべく文化庁より補助金を獲得。派手好きで賑やか好きな原にあっては回顧展をしんみり開くだけでは不服だろうから同時開催の関連企画も加えて派手にやろうということに。メイン会場では回顧展とならび文化庁メディア芸術祭巡回展や複数の作家による展示が行われたほか、サテライト会場として「ARITA-mobile」とのテーマのもと城野敬志の呼びかけにより集まった作家達による展示が有田町内各所で展開された。特に後者の異常な盛り上がりやカオスぶりは当時、

北九州市にいた筆者の耳にも届いていた。
この「ARITA-mobile」は前年 2009 年の有田陶器市の中のイベントとして最初に行われている（城野敬志、塩月悠、川崎陽介ほか）。

○『有田現代アートガーデンプレイス 2011』¹⁷



会期：2011年9月11日（日）～19日（月祝）

会場：焱の博記念堂コンベンションホール・文化ホール・ホワイエ、有田町内サテライト会場、富右衛門窯、有田屋ギャラリー

参加作家：文化庁メディア芸術祭巡回作品、Arita Media Project（中村隆敏、吉田恵一、山口史倫、森永昌樹、速見豪、三浦洋輔）、浦郷慧人、甲斐景子、片岡聡、興梠宜伸、白石恵里、高増ようこ、徳永隆信、富士夢大志、松尾浩一、宮崎千尋、矢鋪與左衛門、優和恵、山本翔、瀬戸口朗子、[サテライト参加作家] 榮子&Doug Friends、榎本信爾、榎本芳子、大竹正祥、川原一紗、小嶋さちほ、高瀬美子、立石さおみ、とびうおりあき、藤川潤司、りょう、田中千鶴

関連イベント：9/10（日）19:30-20:00「WEBで繋ぐお月見会」於 焱の博記念堂コンベンションホール

主催：Arita Media Project、焱の博記念堂

協力：文化庁メディア芸術祭ネットワークス（平成23年度文化庁メディア芸術祭国内巡回事業）、CG-ARTS 協会

後援：有田町、有田町教育委員会、佐賀県、佐賀大学、佐賀県立有田工業高等学校、有田商工会議所、有田ケーブルネットワーク、佐賀新聞社、西日本新聞社、朝日新聞社、読売新聞社、NHK 佐賀放送局、STS サガテレビ、FM 佐賀、NBC 佐賀放送局

協賛：NPO 法人有田どっとこむ、株式会社とっぺん

3.11 東日本大震災が起こった年であり、かつ 9.11 ニューヨーク同時多発テロから 10 周年にあたることを背景に、「世界中の名月を結ぶチャリティーイベント」として「Web で繋ぐお月見会」が 9 月 11 日に行われた。ほか文化庁メディア芸術祭巡回展と複数作家による展示は例年通り。

○『有田現代アートガーデンプレイス 2012』¹⁸



会期：2012年9月28日（金）～30日（日）

会場：焱の博記念堂コンベンションホール・文化ホール、幸楽窯サテライトギャラリー

参加作家：[焱の博記念堂] 文化庁メディア芸術祭

¹⁷ フェイスブック <https://www.facebook.com/有田現代アートガーデンプレイス2011-113384235427499/>（2021年11月23日閲覧）

¹⁸ フェイスブック <https://www.facebook.com/acagp2012/>（2021年11月23日閲覧）

巡回作品、瀬戸口朗子、Team cominica/eddie bond/terabit、プロジェクトマッピング研究会、吉田恵一、中村暖、THE GLITCH MAGES、高増よう子、浦郷慧人、森永昌樹、速見豪、糸山ゆう、植草航、石田祐康、Arita Media Project、[幸楽窯] 近藤伸充、眞崎友、武富洗斗、八頭司昂

関連イベント：9/30（日）19:00-20:00 生花（近藤伸充）+映像（Arita Media Project）パフォーマンス、WEB 中継月見 於.幸楽窯

主催：Arita Media Project、炎の博記念堂

後援：有田町、有田町教育委員会、佐賀県、佐賀大学、佐賀県立有田工業高等学校、有田商工会議所、有田ケーブルネットワーク、佐賀新聞社、西日本新聞社、朝日新聞社、読売新聞社、NHK 佐賀放送局、STS サガテレビ、FM 佐賀、NBC 佐賀放送局

この回より幸楽窯が会場に加わる。幸楽窯敷地内の建物がゲストハウスとして整えられアーティスト・イン・レジデンスが可能になったことから、本企画では佐賀大学生が同所に滞在しながら現地制作に取り組んだ。

○『有田現代アートガーデンプレイス 2013』¹⁹



会期・会場：2013年9月14日（土）・15日（日）焱の

博記念堂、2013年9月14日（土）～22日（日）幸楽窯
テーマ：マナビトクリエイト

参加作家：[焱の博記念堂]有田工業高校デザイン科、文化庁メディア芸術祭巡回作品、Arita Media Project、浦郷慧人、江口昌紀、高増よう子、徳永隆信、速見豪、三浦洋輔、[幸楽窯] 武富洗斗、大神明、吉村美歩、上田美里、石原雅也、西山正晃、小山真、Sebastiao Pimenta、中村勝利、新本総

賛助出品：石多未知行（日本プロジェクトマッピング協会）、株式会社とっぺん

関連イベント：9/21（土）19:00-A.M.P×近藤伸充×山口芳水「名月の声 2013 ネット上お月見パフォーマンス」於.幸楽窯

主催：Arita Media Project

共催：焱の博記念堂、佐賀県立有田工業高等学校、NPO 法人有田町第二のふるさと創生会

後援：有田町、有田町教育委員会、佐賀県、佐賀大学、有田商工会議所、有田ケーブルネットワーク、佐賀新聞社、西日本新聞社、朝日新聞社、読売新聞西部本社、NHK 佐賀放送局、STS サガテレビ、FM 佐賀、NBC 佐賀放送局

前回同様、佐賀大学生による幸楽窯での滞在制作のほか、この回は50周年を迎えた有田工業高校デザイン科による記念展が開催されるなど、特に高大生が活躍した。

¹⁹ フェイスブック <https://www.facebook.com/acagp2013>（2021年11月23日閲覧）

○2014年『Media Butterfly in Arita』



会期：2014年11月1日（土）～23日（日）

会場：九州陶磁文化館、有田商工会議所別館（旧西日本銀行）、赤絵町工房、深川製磁本店、有田うちやま地区、幸楽窯敷地内ギャラリー

ディレクター：中村隆敏

参加作家：チームラボ、飯盛雅子、藤井啓輔、下津優太、森博章、C-revo in Saga、ヤマガミユキヒロ、中村裕太、サントリー美術館、文化庁メディア芸術祭巡回作品、「キングダム」複製原画、[幸楽窯]佐々木ひとみ、上山尚子、原田笙太、濱田誉子、中村勝利、Studio Guu、小山峻、武富洗斗、上田美里、大神明、SCCメディアアート研究会、Arita Media Project

関連イベント：

11/1(土)10:00-16:00 クリエーターズマルシェ 於九州陶磁文化館

11/2(日)14:00-14:30 中村俊介トーク 於九州陶磁文化館ロビー

11/9(日)アニメ・ゲーム音楽演奏会 11:00- 於九州陶磁文化館、15:00- 於有田商工会議所別館(旧西日本銀行)

11/15(土)・16(日)11:00-、13:00-、15:00- ワークショップ「ストップモーションアニメを作ろう」 於九州陶磁文化館ロビー

11/22(土)・23(日)11:00-、13:00-、15:00- 「iPadでつくるみんなのバラバラマンガワークショップ」 於九州陶磁文化館ロビー

主催：佐賀県

共催：Arita Media Project、西日本新聞社、STS サガテレビ、KTN テレビ長崎、LOVE FM、エフエム佐賀

協力：有田町、有田町観光協会、有田商工会議所、深川製磁本店、株式会社香蘭社、佐賀大学地域環境コンテンツデザイン研究所、佐賀大学文化教育学部中村隆敏研究室、チームラボ、公益財団法人サントリー芸術財団 サントリー美術館、京都芸術センター、株式会社集英社、ぺんてる株式会社

平成26年度 文化庁 地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ

佐賀県文化課が文化庁の補助金を得て、ディレクションを中村隆敏に依頼して取り組んだ企画。

○2015年『Media Butterfly in Arita 2nd season』



会期：2015年10月31日（土）～11月23日（月・祝）

会場：深川製磁本店、手塚商店、アルセッド建築研究所、香蘭社、泉山磁石場、佐賀県立宇宙科学館（佐賀県武雄市）、モンネポルト（長崎県波佐見町）

スーパーバイザー：石多未知行

参加作家：ネイキッド、しくみデザイン、KOO-KI、ヤマガミユキヒロ、Projection Mapping Association of Japan、飯盛雅子、Joanie Lemerrier、Davy and Kristin McGuire

関連イベント：

11/1(日)14:00-14:30 石多未知行×中村隆敏トーク 於香蘭社

11/8 (日) 11:00-、13:00-、15:00- ワークショップ
「デジタル装置をつくる」於.香蘭社

11/15 (日) 11:00-、13:00-、15:00- ワークショップ
「スマートフォンとレンズで作る！手作りプロ
ジェクター制作」於.香蘭社

11/22 (日) 14:00- ワークショップ「iPad を使っ
てオリジナルのゲームを作ろう！」於.香蘭社

11/21(土)・22(日)18:00-20:00 Arita Media Project
×Projection Mapping Association of Japan×佐賀
の子供達によるプロジェクションマッピング「ヒ
カリのラクガキ」於.泉山磁石場

主催：佐賀県

共催：西日本新聞社、STS サガテレビ、LOVE FM

後援：有田町、有田町観光協会、有田商工会議所

協力：深川製磁本店、手塚商店、アルセッド建築研
究所、香蘭社、佐賀県立宇宙科学館、モンネポルト、
佐賀大学地域環境コンテンツデザイン研究所、佐
賀大学文化教育学部中村隆敏研究室、Arita Media
Project、京都芸術センター

平成 27 年度 文化庁 文化芸術による地域活性化・
国際発信推進事業

前回同様、佐賀県文化課が文化庁補助金
を得て取り組んだもの。前回ディレクター
を務めた中村隆敏はサポートに回り、代わ
って石多未知行が全体の統括を担った。

■おわりに

全体を改めて振り返って概観しよう。

佐賀市内においては 2004 年以降の
VAROC の活動を端緒として、『呉楽横丁』
(2008 年 1~2 月)、『アートコンプレック
ス』(2008 年 12 月)を経て、2009 年以降、
佐賀大学生と呉服町商店街との共同による
『呉福万博』が急速にヒートアップしてい
き 2011 年にピークを迎え、2012 年に終結
する。その最後の 2 年には地域の大人が佐

賀大学生とともにプロデュースした『コミ
ニカ展』(2011・12 年)が展開された。

有田町内においては、有田工業高校のち
佐賀大学教員の中村隆敏を中心に、地域の
陶芸の作家達による『庭園陶彫展
CERAMIC SCULPTURE IN GARDEN』
(2005 年)に始まり、以降、徐々に有田工
業高校生・佐賀大学生および文化庁メディ
ア芸術祭などとの共同による『有田現代ア
ートガーデンプレイス』(2006-13 年)を展
開、2010 年に最大のピークを迎えつつ、
2014 年から県主導による『Media Butterfly
in Arita』(2014、15 年)が開催され幕を閉
じる。

佐賀市では 2008 年から 2011 年にかけて
の勢い、そして有田町では 2010 年の突出し
た盛り上がりが特に印象的だが、いずれも
佐賀大学の学生および教員の存在が欠かせ
ない。

以下、「地域アート」をめぐる議論を念頭
に佐賀での事例について考察を試みるが、
本調査において集めえた主たる情報は各企
画の広報物(チラシ)とネット上に散見され
る展示風景画像などの断片的な情報に限ら
れるため、各企画の参加作家プロフィール
や出品作品の詳細にまでは至らず、各企画
の概要文や筆者が知りえた主催者・関係者
の主な社会的属性(大学生、民間企業、自営
業、官公庁ほか)の情報に基づいた考察に留
まる。

「地域アート」の語を冠した初の書籍『地
域アート 美学／制度／日本』の編者である
藤田直哉は巻頭論文「前衛のゾンビたち―
地域アートの諸問題」において、「地域ア
ート」の語で論じる対象を、熊倉純子監修『ア
ートプロジェクト 芸術と共創する社会』

(水曜社、2014年)において定義される「アートプロジェクト」で論じられている対象²⁰とほぼ同義であるとし、それらの語で名指される多くの事例において見受けられる美術関係者の「素直」さ、「素朴」さ、「屈託なく、善意で、社会や地域に貢献する」様子に対して否定的な立場を示す。つづいて藤田は筒井浩紀編『コンテンポラリー・アート・セオリー』(イオスアートブックス、2013年)にて現代アートの理論的参照点として論じられる1968年前後の「権力論」や「美術の制度への問い」を含む理論や実践に共感を寄せ、それに対して「叛逆」の精神が「結果としては、非常に素朴」になってしまう残念な代表例として「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」ディレクターの北川フラムにおける思想的な経緯と2000年代以降の実践とのギャップを挙げる。

1990年代以降の「地域アート」に対する藤田の批判は、その源泉を1960年代末の反体制志向の実践に求めようとするところに由来するわけだが、その視点でVAROC(2004-12年)から『アートコンプレックス』(2008年)、『呉福万博』(2009-12年)までの流れを振り返ると、広報物やネットで散見される画像を見る限りでは、特に『呉福万博』以降、素朴さや屈託のなさが前面に出ており、まさに体制迎合的に見えてしまうのは否めない。

ここで佐賀の地域アートの主な担い手が教員や学生であったことを改めて思い起こ

し、以下、教育の視点も交えてみることで、そこに彼らなりの批評性あるいは前衛性を見出せないか考えてみよう。

大学生が地域で取り組むアートプロジェクトについて教育の観点から論じたものとしては例えば、川俣正+ニコラス・ペーリー+熊倉敬聡編『セルフ・エデュケーション時代』、熊倉純子監修『アートプロジェクト 芸術と共創する社会』内の「Chapter1 大学×アートプロジェクト 現場型教育と地域の拠点としての役割」(31~70頁)、パブロ・エルゲラ『ソーシャリー・エンゲイジド・アート入門』などが挙げられよう。

これらから地域でのアートプロジェクトを通じた学生たちの学びに関する言葉をいくつか引いてみると、例えば川俣いわく「地域住民や町の行政との軋轢、公共空間での法規的問題など、さまざまな軋轢を現場で感じ(中略)それぞれが個人の問題として考えていく。それがそのままセルフ・エデュケーション実践の場となる」²¹。加治屋は「地域住民や参加アーティストたちと協働」する広島アートプロジェクトの事例を紹介する前段に、当時の所属先である広島市立大学芸術学部の「理念・目的・教育研究」見直しに当たり「地域社会との連携や海外との学術交流などを通して、芸術の社会的役割を深く認識し、実践する教育研究を行う」との一文を「強い思い」で作成したことを述べる²²。また長田は「大学を起点として学生とともに地域に繰り出すアートプロジェクト

²⁰ 熊倉純子編『アートプロジェクト 芸術と共創する社会』水曜社、2014年、9頁。

²¹ 川俣正「＜保証なきマイノリティ＞とセルフ・エデュケーション」、川俣正+ニコラス・ペーリー+熊倉敬聡編『セルフ・エデュケーション時代』、フィルムアート社、2001年、76頁。

²² 加治屋健司「美大生の考える、まちとアート」、熊倉純子監修『アートプロジェクト 芸術と共創する社会』、水曜社、2014年、35頁。

のとり組み」において「学生が、受動的に解を与えられるのではなく、切り拓いていくこと」に「大学教育の新しい可能性の追求」を見る²³。そしてエルゲラいわく「超教育学では、教育的プロセスがアートワークの中心にあり、それは、学術的、制度的枠組みの外側に、独自の自律的な環境をつくりだす」（傍点筆者）²⁴。

これらの言説に共通する前提は、学生たちは地域でのアートプロジェクトに取り組むことで大小の摩擦や失敗を含め大学の中では得られない学びを得られ、そこに既存の教育制度とは異なる新たな教育の可能性を見出せる、というものであろうし、筆者も概ね同じ考えである。さらに、そこで取り上げられる種々の活動は基本的には教員や美術家などの大人側が大なり小なりの枠組みを設定した上で学生が自主参加または強制参加するもので、かつ、それらの事例については教育者側の視点から論じられていることに留意しておきたい。

これらの種々の事例と、佐賀市内の学生たちによる事例とを比較すると、その活動の枠組みが誰によって設定されたのかという点において、その前提や文脈が大きく異なるように思われる。VAROC(2004-12年)から『呉福万博』(2009-12年)までの活動を見てみると、確かにそこで他者との協働の喜びや、地域との軋轢や手応えなど、大学では得られない学びが副産物として得られ

たであろうことは確かだが、それ以前に、その背景に「反」大学の意識、あるいは控えめにいっても「脱」大学の意識が少なからずあったことを指摘しておきたい。彼らは大人側からの教育的な促しによってではなく、むしろ教育への反抗心に由来する衝動によって地域に出ていった。その点において彼らの活動の見た目の素朴さの背後に、68年代的「叛逆」精神の北川フラム的な昇華を重ね見ても良いだろう。

例えば今回の調査においてVAROCメンバーへのインタビューを通じて「結成当初は脱ホワイトキューブ、脱美術・アートのような心意気・側面があった」「当時、佐賀には自分たちがやりたいと思える美術の舞台が無かったから、自分たちで作るしかなかった」とのコメントを得た。なるほど「佐賀には美術の舞台が無かった」のかと文字通りに受け取るわけにはいかない。佐賀大学では学生の自主企画によるグループ展「総合展」が毎年開催されているが、その選択肢は彼らの眼中に無かったということを言外に読み取れる。また『呉福万博』メンバーによれば、参加学生が地域活動に時間と労力を過剰に割かれるあまり、学業に支障の出る学生も少なからずおり、しばしば教員との摩擦も生じていたという。彼らにとって地域での実践の第一義は、商業スペースの活性化や地域コミュニティの促進よりも前に、まずは美術教育制度の外に出ることであった²⁵。

²³ 長田謙一「総合大学のアートプロジェクト」、熊倉純子監修『アートプロジェクト 芸術と共創する社会』、水曜社、2014年、41～42頁。

²⁴ パブロ・エルゲラ「IX 超教育学という視点」、パブロ・エルゲラ著・アート&ソサイエティ研究センター訳『ソーシャリー・エンゲイジド・アート入門』フィルムアート社、2015年、155頁。

²⁵ したがって美術教育制度からの逸脱を図る彼らの活動を本稿によって再び美術教育制度に回収してしま

そうした彼らの実践は大学側にとっては、職員によって濃淡はあるが、全く関心を払う対象でなかった（そもそも活動自体を知らなかった）か、または度を越して学業の妨げとならぬよう注視と抑制を施すべき対象であったし、少なくとも手放しで積極的に奨励するものではなかった。そうした大学からの無関心や摩擦を背にしながら学生たちが地域で「素朴」に「屈託無く」振る舞うことの動機に裏返しの批判精神、前衛精神を読み取るのは深読みしすぎだろうか。

一方、有田地区の『庭園陶彫展』（2005年）、『有田現代アートガーデンプレイス』（2006-13年）、『Media Butterfly in Arita』（2014、15年）に権力批評性や制度批評性、ましてや「反」学校（高校・大学）的要素を見出すのは無理があるだろう。企画や実践の主な担い手が有田工業高校教員のち佐賀大学教員となる中村隆俊であり、高校生や大学生の参加は彼の呼びかけによるものだからだ。その企画の主軸はデジタル技術を活用した地域活性化および教育で、ここでは学校と地域とのインターフェイスとして美術やデジタル技術が機能しているが、学生たちの活動を見る限り、その関心は地域よりも美術やデジタル技術に向けられている。そこでの学生たちの活動は評価や成績がつきまとう学校課題としてではなく、自主参加が前提なので、学生にとっては（しばしば教員にとっても）教育制度の縛りから一時離れ、心遊ばせる場として機能していた、つまり「反」学校とまではいかずとも、控えめに「脱」学校的な場として機能していたと言えよう。

まとめると、有田町内での事例はそこに批判性・前衛性を求めるよりも教育的側面からの一定の成果を見て良いだろう。また佐賀市内での事例は、結果的に素朴かつ屈託なく見えるものであったとしても、その背後に佐賀の文脈における批判性・前衛性の顕れを透かし見て良いだろう。

さて、佐賀大学では2016年4月、芸術地域デザイン学部が新設され、教員たちは「芸術で地域を拓き、芸術で世界を拓く」ことをモットーとして「地域アート」を後押しする立場となった。そこでは大学の外に出て地域で美術活動を展開することはもはや「反」大学、「脱」大学たりえず、むしろ積極的に奨励されるべきこととなった。今や学生にとって地域での活動は単位や卒業と引き換えに行うものとなった。制度内に回収される前提での実践において批評性や前衛性を保つことはいかに可能か。この点についてはクレア・ビショップ『人工地獄 現代アートと観客の政治学』（大森俊克訳、フィルムアート社、2016年）内の「教育におけるプロジェクト：『いかに芸術作品であるかのように、授業を生きさせるか』（365～415頁）が参考になるが、そこまで深入りすると本稿の趣旨から逸れるため稿を改めたい。

本稿は主に下記の方々から提供いただいた情報・資料をもとに執筆しました。ここに記しきれなかった方々含め、皆様にこの場を借りてお礼申し上げます。

荒木博申 塩月悠

中村隆敏 山本翔

鳥谷さやか 八頭司昂

うことへの些かの躊躇いをここに懺悔しておく。

■参考文献

- ・有田現代アートガーデンプレイス 2010 実行委員会・ARITA-mobile 編『有田現代アートガーデンプレイス 2010 記録集』、有田現代アートガーデンプレイス 2010 実行委員会、2010 年
- ・『原榮三郎回顧展』原榮三郎回顧展実行委員会、2010 年
- ・アサヒ・アート・フェスティバル実行委員会事務局編『ASAHI ART FESTIVAL 2011 アートツーリズムでいこう アサヒ・アート・フェスティバル 2011 公式ガイドブック』アサヒ・アート・フェスティバル実行委員会、2011 年
- ・アサヒ・アート・フェスティバル実行委員会事務局編『ASAHI ART FESTIVAL 2011 アートツーリズムでいこう アサヒ・アート・フェスティバル 2011 報告書』アサヒ・アート・フェスティバル実行委員会、2012 年
- ・2011 年 12 月 16 日（金）佐賀新聞「コミュニカ展 若手芸術家 35 人の挑戦 和の空間で現代アートを。」（原陽子）
- ・各企画の広報物および関連ホームページ（URL は各企画見出しの注の通り）